の多年草で，本州中北部の高地に分布する．秋田県皆瀬村でミヤマホタルイを観察したところ，倒伏して水没した前年の稈の先端に子株を付けた個体があった（Fig. 1）．子株を付けた稈は枯れていたが，子株には長いもので約10 cmに伸びた8本の稈があり，基部から発根していた．これは貫生 prolification によって稈の先端の花序の付く位置に無性芽が生じて水中で成長したものと見られる．フトイ属 *Schoenoplectus* (Rchb.) Palla に近縁なハリイ属 *Eleocharis* R.Br. でも貫生によって無性芽が生じて繁殖する種があるが（角野1994），フトイ属では知られていなかったので実例を報告する．

引用文献

角野康郎1994．日本水草図鑑．178 pp. 文一総合出版，東京．

（東北大学大学院理学研究科附属植物園）

新　刊

□Landolt E., Jäger-Zürn I. and Schnell R. A. A.: **Extreme Adaptation in Angiospermous Hydrophytes** 290 pp. 1998. Gebrüder Borntraeger Verlagsbuchhandlung, Berlin. DM 198.00.

水生植物は多数の分類群にまたがっている．生育環境も種によってかなり異なっているのみならずその形態においても幅広い多様性を示す．本書では地上に生育する一般の植物との形態差が大きい3つの科（ウキクサ科 Lemnaceae, Hydrostachyaceae, カワゴケソウ科 Podostemaceae）を例にあげて形態を中心に，分類，系統について詳述している．ただし，Podostemaceae はフランス語で書かれている．このような形態分類の教科書は英語で書いてもらいたいというのはフランス語が読めない評者の愚痴である．

ウキクサ科の極端に単純化した体制については何人もの植物学者が植物器官学の立場から解釈を試みており，本書はそれらを紹介している．いずれの説が正しいか結論づけてはいないが，ウキクサ科の場合は発生過程の後半が省略されていることは明瞭であるとしている．本書では植物のスケッチ，形態の模式図，組織解剖図，電顕写真，顕微鏡写真などふんだんに使っており本文の理解を助けている．この教科書を読めば，これらの水生植物が一般の植物とどこが似ていて，どの形質が極度に進化または特殊化したかはっきりしてくる．自然環境が悪化し奇麗な池や沼が少なくなり，水生植物の生活場所が失われつつある現在，水生植物の植物学的な面での理解を深めることで自然資源の大切さをあらためて認識させられる思いである．　（寺林　進）

□熊野　茂：**世界の淡水産紅藻**　i-xiv+395 pp. 2000. 内田老鶴圃．￥28,000（税別）．

世界の淡水産紅藻誌である．扱う分類群は紅藻綱，9目，16科，26属，218種・変種で，目，科，属に簡潔な定義と命名上基準となる科名，属名，種名等が記され，さらに科ごと，属，あるいは属内のグループ（群）ごとに，属，種等の検索表が添えられている．各分類群には特徴を示す図や写真が多く挿入されて記述の理解を助け，調べようとする種の同定を容易にしている．著者の熊野茂博士は淡水藻類，特に紅藻カワモズク属の分類をライフワークとして永年神戸大学理学部に勤務した藻学者である．

本書は目次に続いて，世界の淡水紅藻研究の歴史の概説と本書に収録した属の検索表があり，その後に上記の分類群の記述が317ページに亘って続く．ここでは異名，記相，基準産地，基準標本の保管場所，地理的分布などがのべられ，種によっては類似種との区別点など分類学上のノートが付記されている．巻末には命名に関する略語，関係のある標本室略号，関連する学術用語集（日本語の部，英語の部）が添えられ，それは17ページに及び，初心者の便に供されている．引用及び参考文献は1999年までの900余篇がリストされている．本書は英文・和文併記の原稿が既に完成しており，その早期の出版が望まていたが，事情により日本語版の出版が先となったものである．世界的規模の淡水産紅藻誌の

刊行はいまだ例がなく，本書刊行の意義は大きい．著者の労を多とすると共に本書の刊行に心からの拍手を贈りたい．（千原光雄）

□能登谷正浩（編著）：**海苔の生物学** 4 pls.+1-3+172 pp. 2000. 成山堂．¥2,800（税別）．

アサクサノリの仲間（アマノリ属 *Porphyra*）が貝殻の中をトンネルのような穴を掘りカビのような糸状体で夏の高温時期を過ごす *Conchocelis*-phase（コンコセリス相）の発見（Drew 1949）は，温度と日長時間をコントロールして室内培養を行えば，必要に応じていつでも実験材料としてノリ葉状体を得ることを可能にしてくれた．爾来ノリの生物学は長足の進歩を遂げ，その成果はノリ栽培技術に取り入れられ，戦後年間10億枚にも満たなかった日本のノリ生産高は現在では100億枚に達し，かつて略奪農業的であったノリ栽培はタネ（胞子）を蒔いて育てて収穫する近代的農業へと変貌した．

ノリの生物学に関して一つ言えることは，研究は常に栽培技術の改良及び新品種の作出と深い関わりをもって歩んできた事実である．それは陸上植物で言えばイネの研究に比肩できよう．本書の編著者・能登谷博士はアマノリを対象とするこのような学問を「アマノリ学 Porphyrology」と呼ぶことを提案している．

本書は最近のノリ生物学の研究がどのように展開しているか，それはどのような目標をもって進められているのかなどを，I．種の生物学，II．育種，III．有用成分の3部に分けて解説する．I部には種の分類，繁殖様式，DNAによる野生種と養殖種，生長と細胞分化，韓国産とその分布，絶滅危惧種の6章，II部には組織培養による育種，選抜育種，細胞融合による育種の3章，III部にはアミノ酸・ビタミン・ミネラル，糖質，揮発成分の3章が扱われる．執筆は各分野の第一線で活躍の15名による．最近急速に進展し，かつ多様化したアマノリ属を対象とする研究の概要を知るのに好個の書である．（千原光雄）

□山本紀夫，稲村哲也（編著）：**ヒマラヤの環境誌　山岳地域の自然とシェルパの世界** 335＋16 pp. 2000. 八坂書房．¥4,500（税別）．

編著の山本氏が中心となって1994年から3年間にわたり，‘ヒマラヤにおける環境と人間との関係’が文部省科学研究費により組織され，実施された．この現地調査は，その後国立民族学博物館で行われた共同研究‘ヒマラヤ高地における環境利用の民族学的研究’（代表: 山本紀夫）で，さらに解析・統合され，本書に記されるような成果を生んだ．本書のもととなったのは‘季刊民族学’に連載されたその研究報告である．環境誌とは聞きなれない言葉であるが，編者によれば単なる自然誌でも文化誌でもなく，自然と文化をともに含みこんだものであり，それは環境に焦点をあて，それと人間との関係をさまざまな視点から総合的に解明しようとした試みである，という．興味深い論考が多いが，中でも岩田修二氏のヒマラヤとその成り立ちと影響や山本紀夫・土屋和三両氏による多様な植生や半栽培植物への論考は本誌の読者にとってとくに参考になるであろう．本書で解析されている問題は，私自身野外調査で出会ったこともあり，その理解の新鮮さには目を開かされるものも多い．ただ，実際のデータと照らして，理屈が先走りしていると思わざるを得ないところもあるが，これは新しいアプローチにはままあることではある．（大場秀章）